

続・石橋英明駄文集成

LOL (ろる)

あの日見た象の花子の名前を僕たちは知らない。

私はマンゴーが大好きである。特に夏はそうだ。夏が私をそうさせるのか、マンゴーが私を狂わせるのか、それは永遠のミステリーなのだが、ここに困った事が一つある。

あまりにマンゴーマンゴーし過ぎると、一種のセクシャルなハラスメントになるのでは無いかという疑念が私の小さな胸を渦巻くのだ。のだ！

ここで一つ断っておきたいのだが、私はセクシャルなハラスメントを持って良しとするタイプである。だが、それはあくまで想像の中での話であり、ファンタジーの話であり、そういう種類の映像作品を見たり、そういうお店などにおもむき金銭を介してそういうプレイをするのが好きなのであって、普段の私はセクシャルはまだしも、ハラスメントを起こす気も無く(まあ、腹は出てるけどね。ハハハ)人畜無害の人で在。にも関わらず、脂汗を流して「ま…ま…マンゴ……」などと言っているのは明らかに真夏のクレイジーボーイなんだけれどもそんな自分も大事にしたい、なぜかと言うとそんな自分も自分だから。パスタかピザかと聞かれたらパスタと即答する俺。そんな俺だけどピザも嫌いじゃない ZE。的な☆的なウーメンとワイハ(ハワイ)でワイキキなビーチを望。でもそれはきっと叶わぬドリーム。世間知らずのブルース。いや、諦めちゃダメだ。諦めたらそこで試合は終。でも先生、僕はどちらかと言うとモノポリーがしたいです。(独占!)まぶいナオンのハートを独占(独占!)独占禁止法ラブ!(独占!)仲間幸恵主演!(ごくせん!)そんな瞳で見つめちゃ嫌だ ZE(困ります!)白線の内側までお下がり下さい。

「そんなこと言ってもお兄さん、「外側」か「内側」だなんてあくまで主観の話であって、電車の線路の方から見たら、線路側のほうが「白線の内側」になるんじゃないのか？」

「よーし分かった。お前はそこで渴いていけ!!」(イエッサーマム!)

子供の体にいけないボディ。ちょっと危ないデカこと難波のウルフことピーターパンの右腕ことリーマンブラザーズの弟の方(もしくはツッコミの方でも可)こと船越君(後のリンカーンである)を探してます。見つけた方はコチラまで。

そんな訳で初めまして。ジュディ・アボットです!!

※(アリス・ジェーン・チャンドラー・ウェブスター原作 『私のあしながおじさん』より)

お化け怖い

お化けって怖いよね。夜、目が覚めた時にそこにお化けがいたりしたらすげー怖いよね。冷静に考えると、鉈を持った血まみれの老婆とか、ヒグマの方がよっぽど怖いけどね。まあ、目が覚めた時にそこにヒグマがいたら命を諦めるしかないけど、お化けってそんなんじゃない恐さがあるよね。あとさ、鉈を持った血まみれの老婆に関しては、どちらかと言ったらお化けよりだよ。お化けにカウントしてもいいよね。

あとさ、女子。女子が集団になるとね、怖いよ。俺ね、小学二年生の時に、女子の集団になじられて泣いてしまったことがあってね。「男のクセに女子に泣かされて情けない」みたいな声もあったけどね、アレは怖いよ。本当に。よくさ、「御褒美です」みたいなコメントとかあるじゃん。分かってないなあ〜って思うね。繁華街に出没したヒグマを撃ったハンターに「熊が可哀想」みたいなことをいう輩くらいに分かってないなあ〜って思っちゃうね、俺なんかは。女子の集団の恐さを正しく認識した方がいいよ皆。正しく認識した上で「御褒美です」って言ってるなら、その人はもう真性だから、まあ、なんていうか……まあ……うん……

その点、お化けが集団になるとさ、恐さは薄れるね。そんなんただのロッキーホラーショーじゃんってなるよね。実際にお化けの集団に襲われたことは無いけどさ、命の危険とかは感じるかもしれないよ？でもそれってスズメバチの群れとかでもいいわけじゃん。だからさ、お化けは常にピンじゃないって思うんだよ。

孤独であることの哀しさっていうのかな、そういうのがお化けの恐さに凄みを与えると思うんだよ。2人だとさ、なんかさ、デュエットとか歌いそうじゃん。3人以上だとさ、フォーメーションとか色々夢膨らむじゃん。4 - 2 - 3 - 1で、トップ下は誰にしようとか、サイドバックは足が早い人が良いとか、夢膨らむじゃん。や、夢膨らむのは良いことなんだけど、幽霊に関しちゃそれNGじゃん。どんなに鋭いカーブ投げても、将来を期待されるようじゃ幽霊終わりじゃん。さっさとドラフトにかかんなさいよってなるじゃん。ドラフト一位で入団してさ、プロの壁とかにぶち当たるわけじゃん。そこから這い上がるのは一握りでさ、大抵は脱落してさ、飲み屋の店主とかになるわけじゃん。そこにさ、同級生とかくるとさ、なんかさ、合わす顔無いよね。ほんとさ。いや、恥ずかしいことじゃ無いけどさ、でもね、なんかさ、落ちぶれてる分さ、他人がキラキラして見えたりするわけじゃん、余計にさ。なんかさ、そういう時に会う同級生ってさ、怖いよね。

お婆ちゃんのエクスカリバー

洗濯物を取り込んでいるときに、近所のお宅から子供を叱る母親の声が聞えてきた。

「こぼしたらどうするの？ ……ねえ……そう……拭くのよね。分かってるのになぜやらないの？ 『こぼしちゃった～』じゃないの！！」

私はこの言葉を聞いて衝撃を受けた。

私の虹色の脳細胞(何らかの病気だと思われる)の推理によると、怒られた子供は何らかのモノ(おそらく液体であろう)をこぼしたものと推測できる。その際、彼、もしくは彼女がとった行動が、こぼしたモノを拭き取って目の前の問題を解決することではなく、『こぼしちゃった～』と宣言し、ただ現状を受け入れたのである。このことは私に衝撃を与え、衝撃を受けながら洗濯の物を取り込んだ。

私は、時折ビールを敷きっぱなしの布団の上にこぼす。私は、その度に右往左往七転八倒の大騒ぎをするわけなのだが、その際に、落ち着いて、『こぼしちゃった～』としてみるのではどうか。気をつけの姿勢で、左右の手のひらを地面に向け腰につけ、腰を右か左にくいと持ち上げ、口を半開き気味に『こぼしちゃった～』と高らかに宣言するのだ。きっと布団はビール臭くなり、最悪、虫がたかるであろう。

このことは、色んな事に応用が利く

『寝坊しちゃった～』

『二日酔いになっちゃった～』

『バイトさぼっちゃった～』

『無職になっちゃった～』

『無一文になっちゃった～』

『ガス・電気・水を止められちゃった～』

『気がついたら一人になっちゃった～』

そうして、私は路上に暮すサバイバーとなり、真冬の吹雪に凍えながら、どうしてこうなってしまったと、後悔と悲しみとせつなさで心強さと糸井重里を胸に抱きながら、声にならぬ声で嘆き、涙すら流すことも出来ず泣き続けるのだ！

畜生！ これもこれもこの世界に愛があるゆえだ！！ もう愛などいらぬ！！ ただ乳を揉ませてくれ！！

洗濯し、洗濯物を干し、それを取り込み、たたみ、収納する。それら全ての工程を終えたとしても、数日後には、また洗濯をしなければならない。延々と終わることのない苦行。まるで賽の河原ではないか。

人はどうして洗濯をするのであろう。まあ、それは衣服が汚れるからであるが、ならばなぜ、洗濯という重い十字架を背負ってまで人は衣服を着るのか。本当に衣服は必要なのだろうか？

では、アナタがスッポンポンで往来を行けばいい。人はそう言うかもしれない。だが、それは出来ない。怒られるからだ。何の因果か、今の社会では、スッポンポンで往来を行くと怒られるという仕組みになっている。

だから仕方なく服を着ている。そういう人も多いのではないかと思う。その結果、待ち受けているのが洗濯という終わらないディステニーである。なんということであろう。省エネが求められる現代において、これはあまりにもあれではないか。

想像してほしい。誰もが生まれたままの姿で歩き回っている世界を。そこにはお洒落さんもダサイ人もいない。変な英文が書かれたTシャツも、変な漢字が書かれたTシャツもない。洗濯から解放された人々は朗らかで、堂々とチンチンブラブラ、マンマンモジャモジャしている。差別も紛争もなく、ポロリもなければパンチラもない。

いや、ちょっと待って、パンチラは、パンチラだけは、なんとか残してやってくれないだろうか？僕はいいのだ、別にパンチラなどなくても。だが、パンチラがなくなると悲しむ人々は確実にいる。だから、その……せめてパンツとスカートだけでも穿いてはくれぬだろうか。いや、もっと言えばちゃんと衣服を着て欲しい。その方が、何かこう、色々と中身を想像できて良いではないか！！

そうして、衣服を着るということつまり、洗濯をしなければならないということである。洗濯をすることによって、パンチラという素晴らしいコンテンツが守られているのである。よし、洗濯をしよう。そうして、明日のロマンを守ろうではないか！！

そんなことを、洗濯する前にいつも考える。そうこうする内に日が暮れていて、今日も洗濯するタイミングを失うのだ。

子供時代、通信簿の担任からの言葉の欄には、いつもいつも同じことが書かれていた。

『セクシーにもほどがある』と……

そんな小・中・高の12年間を送った私だから、世界中の悲しみを抱えながら踊る夜の回遊魚みたいな目をした少年だったことも、なんら不思議ではない。

私はいつも一人だった。私のそばには親・兄弟や友達、学校の先生くらいしかいなかった。飢えた野犬や田舎のヤンキーなどは一人もいなかった。他には、たまに近くに住んでいる祖母がうちに来るくらいだった。だれもが口をそろえて言った。

『セクシーにもほどがある』と……

大人になった今、振り返って思う。いふほどセクシーだったかと……確かに、ワイシャツのボタンの上三つは閉めなかったし、ピッチリとしたラバーのパンツをいつも履いていた。もちろん、素足に革靴である。でも、だからといって、それだけのことで、セクシーの誹りを受けねばならなかったのか……私がセクシーだというのなら、木村君の方がよっぽどセクシーだったではないか！！

思うに、セクシーさとは、服装や体系よりも、本人のうちからにじみ出る、パフュームのようなものなのだろう。確かに、木村君は、裸の上半身に、乳首がギリギリ隠れるくらいの細いサスペンダーという出で立ちで、フレディーマーキュリーのような胸毛を生やしていたのだが、だれも彼のことをセクシーと言わず、それどころか「体臭が欧米人のそれと近いものがある」と褒めたたえたのも、私と彼とのパフュームの差であったのだろう……

まったく、好きでセクシーに生まれたのではないのに……望まないセクシーと言う名の業を背負って、私はこれからも、生きていかねばならぬのである。

偉大なる日々

僕がまだ年若く、今よりも回数多くこなしていた頃、父は僕によくこう言っていた。「もし、地球上の生物が本気で戦ったら、一番強いのはダイオウイカ」だと。

僕はその言葉を胸に上京し、生き馬の目も抜くような厳しい都会の風の中を、その言葉だけを頼りに生き抜いてきた。それが今の体たらくである。

だが、ある時、私は気がついたのである。確かにダイオウイカは強い。あの強靱な十本の脚に締め付けられたら、きっとマッコウクジラやホオジロザメさえも一たまりもないだろう。だが、それはあくまで海中での話であって、一度陸にさえ上がってしまえば、アルパカすらにも敵わないのではないかと。

あの時の父が、何を思って僕にその言葉を遺したのか、それは今ではもう確かめることも出来なくなってしまった。多分、言った本人である父自身もその事を忘れているであろうし、もっと言えばこれはフィクションであって、実際の父はそんなこと一言も言わなかったからだ。まあ、そんなウニウニはおいといて、父の言葉の矛盾に気がついたとき、私は本当の意味での大人に、誰にも頼ることなく自分の足で生きていく大人に、初めてなったような気がした。

そんなことを実家から送られてきたインスタントラーメンを食べながら思った。あと、口座に三万入れてくれたらいい。これで今月乗り越えられる。そんな気がした。

父母にあわせる顔がないから、正直実家には帰りたくない。

花の名

あなたはタンポポを知っているかい？ いや、伊丹十三監督の映画ではなくて、道べに咲く、可憐な、それでいて逞しい、一輪の花のことを。

こんな文章を読んでもくらいだから、君は最終学歴が幼稚園卒くらいの人物だと思うけれども、そんな君にも分かりやすく説明すると、タンポポって花はね、春になると、黄色い、それは黄色い花を咲かせるんだよ。それはとっても黄色いんだ。嘘じゃない。本当だよ。また春になると道べに目をやるといい。きつと目を引くモノがあるはずだよ。そう、それは多分酔っ払いのゲロだ。春になるとね、色々と増えるんだよね。

話を元に戻そう。ナマケモノは意外に泳ぐのが上手だって話だったよね。でもあくまで「意外に」ってレベルの話であって、特に早いわけでもなく、泳いでいる最中にワニにでも襲われたら即アウトだ。あと、ナマケモノが天敵のハゲタカに襲われた時にとる行動は、「少しでも痛みを感じないように全身の力を抜く」らしい。もっと頑張れよ！ と思うけど、頑張った結果がその行動なのだから、もう我々に出来る事は何もない。ただ、見守ることしか出来ない。そう、それは風に吹かれるタンポポの綿毛のように……

タンポポの花言葉は、「解きがたい謎」(ウィキペディアより)。で、思い出した。たしか、サワラの魚言葉は、「私にサワラないで」というギャグを思いついたのだけれど、それを披露するタイミングを完全に逸し、無駄に年月を重ね、哀しみを知り、そして今、私の頭に留まっていた超絶抱腹絶倒の面白いギャグがあった事を、こうして皆にお伝えすることになった次第なんだよね。思うに言葉という物ほど儚いものではなく、掴んでも指の間からすり抜けるように淡く消え去り、温もりも残らない。「私にサワラないで」というギャグは「サワラ」という魚の名前と、「私に『サワラ』ないで」の『サワラ』の部分をかけたギャグであり、そこに一瞬の煌めきを賭けた物であり、それが受け入れられないと面白くも何ともないものであり、刹那に全てを賭ける無謀な、しかし、強い意志の元凛と咲く、そう、まるで一輪のタンポポのような、なんかそういうのなんだよね。

あなたは、タンポポを知っているかい？ いや、伊丹十三監督による1985年に公開された映画のことではなく(ウィキペディアより)。道べに咲く、可憐な、それでいて逞しい、一輪の花のことを……

教育論

人に頼まれ、頭の悪い文章を一生懸命書いている。読者諸君は、きっと私のことを救いがたいアホな人物だと思っているに決まっている。だが、君らの夢を壊すようで悪いが、本当の私は知性と教養に溢れた立派な文明人である。たとえば、種子植物の『根』『莖』『葉』の区別をすることが出来たり、B E動詞の活用をどうのこうの出来る。そういう教育を受けてきたからだ。

教育とは、木を植えるコトに似ている。せっせとその木を育み、そうして青々とした枝を広げたその先に、豊かな果実が実ったら、私はそれを若いもの達に分け与えるのだ。それが教育というモノであり、そしてそれは希望ともいえるだろう。

こんな教養に満ち溢れた人物だから、職場で品物を間違え (※ちゃんと検品しろと、何度も何度も言われているにもかかわらずにだ！！) 怒られても胸を張って生きていけるのだ。怒られても、私は種子植物の種子植物の『根』『莖』『葉』を区別することが出来る。なんと幸福なことではないか。

学校の勉強がなんになるの？とよく言われるが、勉強とは、学問とは、このように私を強く逞しく形作っているのである。

告発

私は怒っている。今までに無いくらい怒っている。こんなに怒ったのは今週になって初めてである。もう、私はね、声を大にして言いたい。紐靴じゃない靴を履くのはかっこ悪いみたいな、そういう風潮、もうやめにしかいか。

例えばマジックテープである。これは、紐を結ぶという煩わしさを解消するために編み出されたテクノロジーである。しかし、マジックテープ型の靴はかっこ悪いと言われる、ダサいと言われる。だが、私は聞きたい。どうして、あなた方は人々の歩みを、進歩を、未来を明日を否定するのですか？と。そんなにテクノロジーが嫌なのであれば、マジックテープを否定する輩は竪穴式住居かなんかに住んでマンモスでも追いかけていればいい。マンモスなんかいないって？ バカ！ 心のマンモスを追いかけてなさいって、そういう話なのだよ。気持ちだよ気持ち。ハート。ね

実は私も紐靴を履いている。なぜか？ モテたいからだ。不細工デブというマイナスを背負っている石橋である。紐靴を履く事によって、プラスになりたい、そんな私を笑わば笑え。面白いねって。石橋君面白いねって、笑うがいいさ。だが、私はモテない。なぜか。水滴では山火事が消せやしないように、いくら紐靴を履いたところで石橋は石橋なのだ。僕は僕であり、僕が僕である限り要するにそういうことなのだ。結果、もてないデブが今日も紐靴に翻弄されているのだ。

両手がふさがっていたり雨のときなど、「今ここで靴紐がほどけたら嫌だな」って時に、その気持ちが通じたかのようにほどける紐。結び直す事も許されず、紐を揺らし歩いている時に、通りすがりの人から「兄ちゃん、靴紐ほどけているよ」と注意される屈辱。それに答える俺の半笑い。卑屈な半笑い。あのね、言いたかないけど、僕だって赤ん坊の時は可愛かったんだからね！ 僕が笑うと、みんなキャーキャー言って喜んでたんだからね。そんな考えが瞬時に巡る高性能ブレイン(2メガ)。降り積もる悲しみ。どこまでも続くコンクリートジャングル。どうしてこうなってしまったのだろう。この汚れちまった哀しみは、いったいどこからくるのだろう。全ての元凶は、俺が三十過ぎても未だ孤独なその原因は、全て紐靴のせいじゃ無いか！ 紐靴ファック！ 紐靴だけは許さない。もう紐靴なんて履かないなんて言わないよ絶対！ それくらいの、この俺の、憎しみが、こう、ボルケーノしちよるけーの！ っていうことをね、どうしても伝えたかった。これだけは本当に。偽りなく、俺の気持ちを。

以上、靴にかかる金額は大体三千元くらいのお洒落マンモス。石橋英明でした。

私のプライベート

悪いけど私セレブですから、朝食は毎日クロワッサンとコーヒーですの。英字新聞読みながらね。それから熱いシャワーを浴びて、バスローブを羽織って、英字新聞を読みますの。

英字新聞ではアレですの。コボちゃん一家が、みんな金髪ですの。犬がシェパードですの。猫がヒマラヤンですの。四コマ目で大体誰かが「オーマイガー！」って言ってますの。だって英字新聞ですものね。

通勤電車はセレブ専用車両ですの。新宿渋谷間で三万円くらいしますの。まあ、お得ですわね。オフィスに着くと、秘書が注いでくれたコーヒーを飲みながら、英字新聞読みますの。

ランチはいつものオープンカフェですの。アブラマシマシ・ヤサイオオメの大豚ですの。もちろん、英字新聞読みながらよ。英字新聞では、阪神タイガースが勝つと、「マジック130点灯！！」とか無茶なこと言い出しますの。毎年のことですの。

アフターファイブは優雅に銀座をプラプラしますの。銀座・マツヤで牛丼大盛りですの。セレブですもの。もちろん味噌汁はトン汁に変更しますわよ。

それから吐くまで飲みますの。ホッピーを「中」だけおかわりし続けながら、吐くまで飲みますの。

そして帰って熱いシャワーを浴びて、バスローブに身を包み、英字新聞ですの。あと、セレブですもの。ジャンプもマガジンも、ほとんど英字ですの。セレブですもの。仕方ないですわね。でもセレブですから、ジャンプは毎週日曜には新しいの読めますのよ。

土日は、昼まで寝てますの。そして、昼間っから焼酎水割りを飲みますの。つまみはイカの塩辛ですの。それから吐くまで飲みますの。

毎日吐くまで飲みますの。

私は、野菜や肉を鍋で煮込むのが好きだ。ただただ煮込むのが好きだ。仕方ないので、煮込んだ後、シチューやカレーにして食べている。煮込んでいる時、何となく物事が正しく前に進んでいるような気がするからだ。物事が正しく前に進むような気がするの気分がいいので、野菜や肉をただただ煮込んでいる。

肉や野菜を鍋で煮込むコトが善だとしたら、その対極にあるのは洗濯である。洗濯は、必要悪でしかない。汚れ物を洗濯機にいれ、洗剤をいれ、スイッチを押し、後に洗濯機が完了したら洗濯機から洗濯物を取り出し、皺を伸ばし、干し、それから数時間後、乾いた洗濯物を取り込み畳み、所定の位置にしまわなければならない。おかげで、洗濯機が動く音を聞きながら、これから待つ『干す』という作業のことを考え気が滅入り、干している間は『取り込み、畳み、しまう』という最終工程のことを考え気が滅入る。物事が正しく前に進んでいる気がする暇など一秒もないのだ。結果、私は『畳み、しまう』という二つの作業を完全放棄したため、部屋が荒れ、私は深い悲しみを胸に抱いたまま今日も眠るのである。とんだ悲しみディスターである。

今、日本社会は岐路に立っている。皆が『物事が正しく前に進んでいる』という錯覚の中で生活している『煮込み型社会』か。皆が深い悲しみを抱えつつ日々を生きる『洗濯作業放棄型社会』のどちらに進むか、という分岐点にである。

私はそれを見守っていこうと思う。いつか部屋を掃除するという、見果てぬ夢を抱きながら。

天は自ら助くモノを助く。という。ならば、自ら慰むモノを慰むことはあるのだろうか？ 自ら慰むこと三十年、信頼と実績の石橋こと私に言わせてもらえれば、天はとりあえず今のところはスルーらしい。

迷える時、困難に直面した時、私は時々、祈り念ずることがある。「天よ、願わくば私の部屋を掃除したまえ」「願わくば我に金麦を買ってきたまえ……」と。それらの祈りも、今のところスルーされている。

天は、汝の隣人を愛せよ。という。私の隣の部屋には家族づれが住んでいて、休みの日などは、外で遊んでいる子供たちと出くわしたりする。いくらなんでも彼女らを愛してしまうと社会的にまずいので、私はこの言葉に関してはスルーすることになっている。

また、右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せ。とも言う。だが、育ちの良い品行方正の私は生まれてこの方ぶたれることなど、たまにしかないのでこの言葉に関しても基本はスルーである。ただ、それが何らかのプレイであった場合においては、その限りではない。

こんな風に、基本、私と天はお互いスルーしたりされたり、微妙な距離を保ちつつ良い関係を築いている。スープの冷めない距離とでも言おうか。

持ちつ持たれつ、ではなく、持たず持たれられず。ウィン・ウィンというか、ルーズルーズの関係。そういう具合に、私たちは良い関係を保っている。

あとさ、「オーメン」って、「アーメン」と何か関係あるんかね？今、ふとそう思いついた。

少年の日は今

出会いは心のピンクローター。どうも。石橋英明です。私は完全無欠な人物なので苦手なモノなどありませんが、強いて一つあげるとしたらズボンを買うのが苦手です。

ズボンを買うには、先ず勇気を出して服屋に入り、脂汗を流しながらズボンを物色しなければなりません。その後、穿いた瞬間破れちゃわないかどうか心配しながら試着室に行き、ズボンを穿き、そして店員さんに「すいませーん、裾あげお願いしますう」などと言わねばならぬのです。こんな屈辱あるでしょうか。

その後、カウンターにズボンを預け、暇つぶしに入った本屋で新刊をチェックし、それからカフェにおもむき買ったばかりの本を読みながらラテを飲むなど、優雅な時間を過ごす事を強いられます。

そんな仕打ちに耐え、結果得られるのがズボンとカフェで過ごした有意義な一時だけなのです。しかも、その際、ズボンや新刊・ラテを購入した分の代金をきっちりとられるのです。タダでズボンは得られないのです。これが社会の厳しさなのでしょうか。

先日、原宿で黒人さんの客引きに「オレ、服に金かけないんですよ。こだわりとかないんで」といった所、「ウン、ソレハ見レバ分カルヨ」って言われました。すいません、少し泣いていいですか？

地球万歳

地球・みんなのかけがえのない地球、素敵な緑あふれる星地球。そんな地球が、今、大ピンチなんだ。

こう言っても君は、「またまたそんなこと言って、私は騙されませんよーだ。」と言って、暖房ガンガン効いた部屋で、雪見大福をほおぼるんだ。僕が「一個ちょうだい。」と言うのを聞きもせずに、雪見大福をほおぼるんだ。まったく、意地汚い奴だよ君は。

でも、そんな僕に君はこう言うだろうね。「雪見大福は、そもそも二つしか入っていないから、一個ちょうだいて言われても、その一個が占める割合が他と比べて大きいんだ。」と。

あのね、私はね、そんな割合の話なんてしてらんじゃないんですよ。ただこう、シェアの精神をね、持ってみてはいかがとっておるのです。それになんです！ 胸に大きな雪見大福二つもつけているくせに！ 一個くらい揉ませなさいよ！！

なんて言ってね、炬燵で、キャッキャウフフするのをです、私はね、寒い部屋で一人、想像しているのですよ。

寒い部屋で、一人、想像しているのですよ。

だからね、今僕にできることは、ペットボトルを資源ごみに出すことくらいなんだ。

地球万歳

地球万歳

だからその

雪見大福を僕に下さい

中2病でもオナラがしたい

朝起きたらメガネが歪んでいた。困った私は、歪んでいるのはメガネではなく世界の方だということにした。だってそうでしょうもん！！ 人々は傷付けあい、赤ん坊は泣き叫び、若い男女は乳繰り合い、老いた男女は茶を啜りあう。まったくもう……まったくもうだよ畜生！！

メガネが歪んだら眼鏡屋さんに行けばいいじゃ無いのと人は言う。だが、眼鏡屋さんに行くには、布団からカラダを起こし、洗顔や歯磨きなどを済まし、下着を穿き、ズボンを穿き、シャツを着て、今日は寒いから外套がいるかな……等と思案をし、靴下を履くなどしなければならぬのだ。しかも、しかもである、これだけのことをしながらもまだ、ただの一步も眼鏡屋さん近づいてすらいないのだ！！ これを絶望といわずしてなんとおもうか！ そんなんだから、休日は一步も外に出ずに、部屋で一日中ビールを飲みながらニコニコ動画をみたりしているのだ。

そもそも、なぜこの私が、暗黒のシュナイダーと呼ばれるこの俺様が、ワザワザ眼鏡屋などに出向かねばならぬのだ。眼鏡屋の方から我の元へ馳せ参じるのがスジであろう。眼鏡屋だけでなく、飯屋や服屋やカラオケ屋などもそうだ。天空のシュバイツァーたるこの我が寛大な心を持っているからこそ今まで言わないでおいたけれども、本来ならば、そちらから来るのが道理であるのに、こちらからワザワザ出向いてやって、その上まださらに金銭まで巻き上げたりする。

如何なる心積もりであるか。いい加減にせねば煉獄のケンジ・ハガたる私の怒りをかうぞ。具体的に言えば、2ちゃんに書き込むぞ！！

まったくどうしてこんな歪んだ世界になってしまったのか。我が右腕であるアベ・ジョージは何をしておるのだ。真に本意ではないが、この世界の歪みを我が直接たださねばならぬようだ。なのでバイトを休みます。って言ったら怒られるかな？

ベストアンサーに選ばれた答え

怒られます。

昔々あるところに、お爺さんとお婆さんと、坂本竜馬がいました。ある日、お爺さんは川へ洗濯に、お婆さんは川へ洗濯に、坂本竜馬は川へ薩長同盟をしに行きました。

坂本竜馬が川で薩長同盟をしていると、川上から武田鉄矢が流れてきました。それを見た坂本竜馬は、「これはイケル！！」と確信しました。

それから長い長い年月が流れました。長い長い年月が流れて、お爺さんは死にました。お婆さんは死にました。坂本竜馬も武田鉄矢も、村田のジョニーも死にました。みんなみんな死にました。最期にポッカリ哀しみだけが残りました。

そんな時に救ってくれたのがこのチャレンジです。要点を丁寧に分かりやすく書かれたテキストは、可愛いイラストもあいまって勉強をする苦痛を全く感じさせません。赤ペン先生によるきめ細かい指導で苦手な教科もバッチリ。しかも、チャレンジなら、一日たったの30分でいいのです。

チャレンジのお陰で、部活では160kの剛速球で相手の顎を砕き、彼女もでき、開国にも成功し、その結果文明開化をなすことが出来ました。

だからみんなもチャレンジをしましょう。さもなくば、冴えない青春を過ごし、冴えない人間になり、歩道の狭い道路を行き交うトラックに怯えながら歩く羽目になります。大雨の日にね。

ここまで言ってもダメですか？しょうがないですね、分かりました。それじゃあみんなあで朝日新聞を読みましょう。

東京ミッドナイト

私が『アパレル界の風雲児』と呼ばれていたころだから、もうかれこれ二十年くらい前のことになる。

当時の私は血気盛んな十代のリビドーそのままに、夜な夜な仲間たちと街でアパレルまわっていた。ある時はカジュアルなダウンジャケットを着こなし、またある時はラメ入りのキラキラ光るダウンジャケットを着こなし、またある時は、お通夜の席なので黒いダウンジャケットを着こなし、TPOを弁えたり、それはもう、風雲児の異名に恥じないアパレルっぴりだった。

しかし、そんな輝かしい青春の日々はそう長くは続かなかった。まるでダウンジャケットが一段一段もげていくように、仲間たちが、ある者は学業に専念するため、ある者は実家のパン工場を引き継ぐために、一人ひとりアパレル界から足を洗っていったのだ。

そうして、ただ一人残された私は、ボロボロのダウンジャケットに袖を通し、ただ一人残された最後のアパレルのプライドをかけて、夜の街・性風俗店へと繰り出していった。

……私の最後の戦いは三分で終わった。

先日、性風俗店へ行くか行くまいか迷っている私の元へ、ある知らせが舞い込んだ。かつてのアパレル仲間だった、アパレイエローこと木村君が、この年末に結婚するのだという。聞けば木村君は今ユニクロで正社員として働いているらしい。あんなにやんちゃなアパレル坊だったのが、嘘のようである。

青春の日々の思い出は、いつもどこかほろ苦い。今日の夕食はペヤングにしよう。

今日みたいな東京ミッドナイトには、大盛りペヤングがよく似合う……

未来への提言

世の中には色々なスポーツがあり、様々な選手権大会が行なわれている。応援する人は、選手権の度にハラハラドキドキし、応援する対象の勝利や敗北に激しく一喜一憂するのだ。

応援していた対象が勝った時はとても嬉しい。しかし、負けたら前歯が全部へし折れるほど悔しい。これではとてもじゃないが身が持たないではないか。だが、何者も応援しない人生というのも寂しい。ダシの無い味噌汁のような味気ない人生である。そこで私からの提案であるが、これから私、石橋英明を応援して生きていくというのはどうだろうか。

特に私は戦っているわけではないので、勝ったり負けたりする予定はない。なので、アナタは激しく一喜一憂をせずとも済み、アフタヌーンにティーを飲むなどして落ち着いて過ごすことが出来る。ただ、私は時々何もなくて足を挫く。応援している対象が足を挫いたアナタは少し悲しい気持ちになるだろう。そこがこの提案のミソである。

私はこれまで何度も足を挫いてきた。その度に痛い思いをするだけであった。これでは丸っきり挫き損である。でも、これからは違ってくる。私が足を挫くたびに、応援してくれる人が少し悲しむ。そんな少し悲しんでいる人の顔を見て、そんな顔を想像して、私はほくそ笑む。ほくそ笑んで明日へと進むことが出来る。まさに、足の挫きがいがあるってモンである。

勘違いしないで欲しいのだが、別に私は人の悲しんでいる姿を見て喜ぶような趣味はあんまりない。少ししかない。そんな姿よりも、小犬や子猫がじゃれているのを見たほうが、ややよい。だけど、これだけは覚えていて欲しい。アナタが「石橋、今どうしているかな……」などと思いながら星を見るとき、私はチョクチョク足を挫いているというコトを。そして心をほんの少し痛めて欲しい。その心優しいアナタの流した涙があって初めて、私は少しほくそ笑むことが出来るのだ。

まだ見ぬアナタよ。私はそういう男なのだ。こんな男でも、私のことを応援してくれるだろうか？もし、応援してくれるのであれば、今なら抽選五名の方にシールをあげよう。

実に丸く大きく突き出ている。私の腹の話である。なぜ、こんなにも肥え太ったのだろうか。よく食い、よく飲み、よく眠り、あげくあまり動かない生活を送っていたことくらいしか心当たりがないのだが……ウスウス気がついてはいたが、私はこれからデブとして生きることになるであろう。

デブの道は修羅の道。デブ道とは、太る事と見つけたら！！

これからはデブとして生きる。デブは確かに社会的に優遇されている点がある。(グラム当たりの電車賃など) だが、同時に社会に対する責任も発生するのだ。ノブレス・オブ・デーヴ。一つに、デブは常に暑がっていないとてはならない。一つに、デブは常にお腹を空かせていなければならない。一つに、デブは必ず御馳走を食べる夢を見なければならない。一つに、デブは必ずキャッチャーをやらなければいけない……

私は、偉大なる先輩方が歩んできた茨の道を、この足で進まねばならない。

『なろうなろう明日なろう・明日太った人になろう！』私はここに、あすなろ会の結成を宣言する！！！！

日本の歴史上、もっとも強い人物はだれか……その謎が、今さっき解けました。私の頭の中で。なので、今回は、そのことについて、お話ししたいと思います。

一概に『強い』と言っても色んな強さがあります。たとえば腕力や筋力の強さであれば、おそらく豊臣秀吉はお相撲さんには勝てないだろうと思われれます。秀吉が必殺の一夜城を繰り出しても、お相撲さんのジャパニーズ・ハリテで一発KOでしょう。少なくとも私の頭の中では。

だけれども、組織として人を動かし、武力をもって他を制する力であれば、どんなお相撲さんでも、豊臣秀吉にはかなわないのです。では、豊臣秀吉が最強だということでしょうか？ ホームランを一本も打っていないのに？ どんなに豊臣秀吉の武力がすごいと言っても、通算成績でホームランを一本も打ったことがないのであれば、プロの四番バッターとしては失格なのです。そして、これは私の頭の中の話だけではなく、確固たる事実として、豊臣秀吉は、その生涯の中、ただの一度もホームランを打ったことがありません！！！！

さて、困ったことになりました。一概に『強さ』といっても、その基準をどこに置くかを決めなければ話になりません。強さとは、なんでしょうか……腕力でしょうか？ 武力でしょうか？ 打率でしょうか？ アゴヒゲでしょうか……

ここで、私は、一つの結論に至りました。

『強さ』とは、『サッカーがどれくらい上手にできるのか』であると。

そんなわけで、日本史上最強の人物は、キング・カズになりました。

続・石橋英明駄文集成

<http://p.booklog.jp/book/80446>

著者：石橋英明

発行：L O L（ろる）

発行元プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lollolol/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80446>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80446>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ